行ってみ！チャレンジ
報告書

氏名：今泉楓

渡航先：モンゴル

計画申請日：2022 年 6 月 10 日

計画終了日：2022 年 8 月 26 日

１． 渡航概要と目的

大学の夏休みを利用して、一か月間モンゴル国に渡航した。当初は、三週間の滞在を予定しており、二週間は遊牧民の家庭にホームステイして彼らの生活について学び、その後の一週間は首都ウランバートルでホームステイをしつつ、現地 NGO の運営するアフタースクールでボランティアをする計画だった。しかし、ウランバートルへの移動後に、新型コロナウイルスに感染してしまったために、ウランバートルでのボランティアについては参加できなかった。また、日本への入国条件を満たせなかったため滞在日数が延び、１ヶ月間の滞在となった。

渡航目的は、遊牧民の伝統的な生活の仕方や考え方を学ぶと共に、近代化が急速に進む同国において、彼らの生活がどのように変化しているのかを自分の目で見て理解することであった。そして、近代化が大いに進展した一方で、閉塞感が漂うようにも思われる現在の日本社会と、遊牧民社会やウランバートルでの生活を比較することで、発展や豊かさとは何か、今後の日本社会が目指すべきあり方とは何か、といった問いについての考察を深めたいと考えた。

２．渡航先を通じて感じたこと、学んだこと

(１)遊牧民生活

ホームステイ先は、ウランバートルから 100 ㎞ほど離れた場所に住む、4 人家族だった。隣には、ホストファザーの兄家族が居住していた。彼らは、ゲルと呼ばれる移動式の住居に居住しており、居住用と調理・食事用の２つのゲルを持っていた。ホストファミリーは、約 600 頭のヤギや羊、牛 40 頭、馬 50 頭を有しており、私は主に家畜の世話や家事、子どもの世話を行った。

私は、まず最初に多くの電化製品があることに驚いた。出発前は、ホームステイ先では電波は入らないと聞いていたが、実際には３G に対応しており、ホームステイ先の家族や隣人

はスマートフォンを頻繁に利用していた。主要なツールは Facebook であり、また親戚や友人との電話やビデオチャットもほぼ毎日行っていた。家電製品としては、照明、二層式洗濯機、ポータブル冷蔵庫、テレビがあり、一枚のソーラーパネルで自家発電を行い、電気を賄っていた。なお、テレビは滞在中に一度も使用されておらず、洗濯機の使用は一度のみだった。

電化製品やスマートフォンの便利さを改めて感じる一方で、子どもたちが外で遊ぶ代わりに動画サイトやゲームに熱中している様子から、従来とは時間の使い方が確実に変わっていることを感じ、今後は日本と同様にスマホ中毒や視力の低下等が問題になっていくのだろうと思った。また、ホストマザーが、服やスマートウォッチなどネットショッピングで買いたいものを次々と見せてくれ、彼らの消費生活も日本での私の消費生活も、同じ世界規模の市場経済の一部であることを実感した。

一方で、家畜を中心とした生活のあり方は、やはり農耕中心の日本の生活とは異なる点が多く新鮮だった。特に印象的だったことは、馬乳酒づくりと山羊の屠殺である。馬乳酒は馬の乳を原料とする乳製品で、栄養価が高く、夏のモンゴルでは子供から大人まで誰もが好んで愛飲する。実際、ホストファミリーも大きなお椀で次から次へと飲んでいた。馬の搾乳は重労働であり、まず子馬に乳を吸わせて親馬を安心させた後で、子馬を引き離して搾乳するというものだった。夜には、乳を撹拌する作業があり、子どもから大人まで代わる代わる作業をした。また、家畜の山羊や羊を自分たちで屠殺して食すという一連の流れが、当たり前に生活に組み込まれていた。ホストファザーが小刀一本で、内臓を取り出し、皮をはぎ、解体していき、ホストマザーは内臓を下処理し、肉を部位ごとに仕分けていた。いずれの作業も力や時間を要し、何より、命の存在が非常に近かった。日本では、肉はスーパーでパックに入って売られていることが多い。私は、実際の屠殺を見て、鮮度を落とさずに部位ごとに丁寧に分け、毛が一本もないきれいな状態で売るまでに、どれだけの労力がかかっているのかという点に、恥ずかしながら初めて思いが至った。日本で、一体どれだけの人が肉や魚を買い食べる際に、パック売りになるまでにどのような人がどのような作業をしているかを知っているのか、興味が湧いた。

この他にも、羊や牛を馬で追う様子や、牛の乳をヨーグルトやチーズなど様々に加工する方法、家畜の寄生虫の取り方など、家畜によって生計を立てる方法には、伝統が深く受け継がれていた。

このように、遊牧民の生活は技術の進展を取り入れつつ、伝統的なあり方も色濃く残していた。しかし、ホストマザーは、自分の子ども達の将来については、都市で生活をし遊牧民生活は継がないと言っていた。近代化の大きな波は確実に進んでいて、彼らもまたその中にいることを実感した。

平日の夕方に、子どもも大人も集まって日が暮れるまでバスケットボールをする光景を見ながら、この光景もこの世代で失われてしまうのだろうとふと思った。部外者の勝手な感傷に過ぎないと分かりつつ、長らく続いてきた生活が都市の均一な生活へと変わり、自然が開発されて都市が拡大していくことに、寂しさを感じた。しかし、やはり都市の生活は快適で便利であり、近代化が否応なく進んでいく様を間近にみることができたことは、貴重な経験となった。

（2）ウランバートルでの経験

首都ウランバートルは、160 万人以上というモンゴル国の人口の半数近くが居住する大都市である。マンションが立ち並び、道路はいつもたくさんの車で渋滞していた。コンビニエンスストアや大きなデパートも多くあり、経済発展している様子が伝わってきた。中でも、韓国料理屋や韓国製品が多い事に驚いた。実際に、モンゴルと韓国は、文化や外交、経済など多様な結びつきを強めているそうだ。日本にいると、日本と相手国の関係に関心が集中しがちだが、多様な国際関係に目を向ける必要性を学んだ。

また、モンゴル国立大学の学生 4 名と交流する機会にも恵まれた。彼らは、モンゴルがまだまだ発展途上であり、日本が羨ましいと言っていた。社会主義の中で過ごしていた上の世代とは意見が合わないとも口にしており、非常に興味深かった。経済発展や、日本についての認識など、より深く議論してみたい点は多く残ったが、自分たちの国はより良い

方向へ向かっており、自分達が更に今後の発展を担っていくのだという、彼らの前向きなエネルギーに多くの共感と少しの羨ましさを感じた。

ウランバートルに移動して３日目に、新型コロナウイルスに感染してしまい、以後は隔離生活となった。そのため、ボランティア活動に参加できず、現地の方々と交流することもできなかった事が大変心残りである。

３．今回の経験を今後どのように生かしていくか

非常に短い期間とはいえ、遊牧民の方々やウランバートルに住む方々の実際の生活にふれることができ、非常に貴重な経験となった。今後は、今回の経験をよりアカデミックに考察できるように学びを深めたい。例えば、モンゴルへの経済援助の国別割合、遊牧民に対するモンゴル政府の政策の変遷、社会主義時代のモンゴル社会の経済状況や自殺率といった事柄について学び、自分が現地で得た知見と重ね合わせてみたい。そして、日本社会とのより詳細な比較も加えながら、自分なりに発展とは何かという大きな問いへの考察を続けていきたい。

また、今回は、新型コロナウイルスに感染してしまい、利用したボランティア団体のスタッフや日本大使館の方、両親など、多くの人に迷惑をかけるという苦い経験もした。渡航のリスクをいかに管理すべきか、不測の事態にどのように対処すべきかについて、多くを学んだため今後への大切な教訓としたい。

４．今後本プログラムを希望する人へのアドバイス

インターネットで世界中とつながっているようにも思われる昨今ですが、今回の渡航で私が最も強く感じたのは、現地に行かなければ分からないことがたくさんあるということでした。そして、このプログラムは、自分の挑戦を応援してくださる、本当に素敵なプログラムだと思います。

少しでも行ってみたい、やってみたいという気持ちがあれば、ぜひ挑戦してみてください。

５．主な支援金の使途

航空券代、プロジェクト・アブロード活動費、保険代

95 11 ТЕА